慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	家屋構造と経済状態
Sub Title	
Author	下村, 宏
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.4, No.4 (1910. 10) ,p.439(71)- 458(90)
JaLC DOI	10.14991/001.19101000-0071
Abstract	
Notes	講演
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19101000-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

たらざるを得ず。然りとて其發達を獨り其赴く所に放任せんか、有害なる方面に奔逸するの危險は之を免れざる可し。是に於てか處す可きの途は唯一あるのみ。他なし。其發達は之を助長すると共に其發達を善導して有利の方針に馳せしむると換言すれば其發達と共に其惡果を制限す可き爾餘の高尚なる美德の發達をも助長し、兩々相待ちて眞正なる經濟的發達の効果を擧げしむ可きこと卽ち是なり。（完結）

講演

家屋構造と經濟狀態

下村宏

私の題は東西家屋の構造の違ふのは、經濟狀態、社會狀態にどう云ふ影響を及ぼすかと云ふのでありますが、其意見を私が此所に申上げるのではなくて諸君に研究の材料を與へて諸君に研究を願ひたいのであります。

私は諸君に御研究を願ひたいのは歐羅巴各國の家屋の大きさと、それから歐羅巴各國の人間の身體の大きさと、それから家屋との比例であります、是がどう云ふやうになつて居るかと云ふことを諸君に御研究を願ひたひ、私は未だ調査が出來て居らない、それから假に歐羅巴各國の家屋の大きさと西洋各國民の身體の大きさの比例が若し分つたならば、日本の今日の家屋と日本の吾々の體格との大きさの比例が又どうなつて居るか、私の外國を多少廻つた實驗に依ると、歐羅巴でも露西亞の家屋であるとか、或は獨逸の家屋、或は佛蘭西、英吉利、是等の土地に於ては家屋は大きかつたと記憶する、同時に和蘭であるとか或は白耳義の諸國では家屋が比較的小さかつたし道幅も狹かつたやうに記憶する、無論家屋と云ふものは時代に伴うて變遷のあるものでありますから、白耳義のガンであるとかアンヴエルス、和蘭のアムステルダム、ロッターダムと云ふやうな古い土地は、今日新に勃興しつゝある例へば北米合衆國の如き建國に比して無論非常に小さいと云ふことは當然の事と思ふ、なれども大體に於て西洋人の大きさと西洋の家屋と云ふものと、日本人の大きさと日本の家屋と云ふものを方程式を拵えたならばどう云ふ工合に違つて居るか、それで私は數字でどの位の歩合と云ふことは申上げ兼ねるが、私の家屋の大きさと云ふ意味は主として間取の大きさと云ふこ

とを言ひたい、西洋では一つの家屋の中に澤山の家族が住んで居るのですから日本人の率を以て推すことは出來ない、部屋の間取だけに就て見るのであるが、私は西洋人の體格の大きさに就ては西洋の家屋の間取と云ふものは、日本人の體格に就ての日本人の住んで居る家屋の間取よりは大きいと思ふ、反對に言ふと日本人の身體の小さいことは西洋人の身體より餘程小さい、併ながら西洋の家屋の間取よりも日本の家屋の間取の小さいことは尙ほ以上であると云ふことを思ふ、是は諸君も御承知でせうが吾々日本の家屋で立つと、私は多少高い方であるが少し脊伸すると鴨居へ頭がつかへる、それから天井を見ると一尺か二尺、三尺と天井までに餘裕のある所は少い、此家屋は西洋の間取にして部屋の大きさと果して比率を得て居るか、是は結構な建物でありますかどうか分りませぬが、假に西洋人が立つたと假定して天井に對する感覺はどうかと謂ふと確に廣ひに相違ないが、低い吾々が身體の小さい以上に尙ほ此低い部屋に住んで居ると云ふのは何故であるか、是が一つの問題であります。

デ私は此問題は一つは坐ると云ふことゝ腰掛けると云ふことに出て來はしないか、坐つた時には眼が下つて來るに相違ない、頭もくつ付て下るのであるから、此下つた坐つた時の眼で天井を見る、四方を見る時の考と、腰を掛けた本位から天井を眺め左右を眺める時の感想とはどうしても違ふに相違ない、それで若し其所の部屋の大きさが自分の高さと、誤り自分の下の地平線と云ふか坐つて居る所との線を描いたならば、腰掛け居る場合の方が坐つて居るよりは比較的尙ほより大きい場所を持つて居らなければ、壓迫せられるやうな、せゝこましいやうな、押潰される樣な觀念が起るに違ひない、そこで單に坐つて居ると云ふことゝ、それから腰を掛けて居ると云ふことだけでは問題は頗る簡單でありますが、日本人と西洋人の差はそれ以上一歩進んで居りはせぬかと思ふ、卽ち大なる西洋人は腰を掛けるに非ずんば必ず他は立つて

ゐる人間で、日本の人間は身體が小さい所へ、彼等は坐る外は寢る人間である、それで坐ることが動もすると横になりたがると云ふ日本人と、腰を掛けて居つて立つ外方法を見出すことの出來ない西洋人とは、經濟狀態に於ては如何なる影響を及ぼすか、それで坐る者の寢るのは暫く措て、腰を掛けて立つ外術のないと云ふのは何故かと言へば靴を穿いて居る、其儘直ぐ外へ出ると云ふことを意味して居る、外へ出る爲に穿物を要せぬ、穿物で中に居るのだから坐ることも出來ねば寢ることも出來ぬ、是は確か福澤先生も何かに話されたことがある、私は書籍の上で承知して居るやうに思ふですが、單純なる一家の經濟と云ふ上から見て、日本ほど書生や女中の餘計要る國民は先づ少いと思ふ、身分相當から言うても富の程度から見ても、所得の程度から見ても、日本人ほど女中を使ひたがり、子守を使ひたがり、乳母を使ひたがり、書生を使ひたがる國民は蓋し少いだらう、是は一國の經濟狀態に於て私は實に由々しい大問題ではないかと思ひます。

今日の日本の家庭の狀態は、誰しも腰を掛けて居る者は無い、あつても少い、隣の部屋へ行つて或器具物品を取寄せる、隣の部屋へ行つて用事をするにも、座つて居る者が立つよりも腰掛けて居る者が立つ方が動き易い、それが日本人は坐つて居る、殊に吾々の若い時分のやうに冬など寒いからと云つて胡坐をかいて着物ですつかりくるまつて居る時などは、實は其時分に女中も書生も無いから呼べぬのちやが、全く其時はすべき用事もせぬと云ふことになる、それで坐る寢ると云ふことは不規則と云ふことを意味し無性と云ふことを意味する、腰を掛けて居ると云ふことは已むを得ず規則立ち已むを得ず活動せねばならぬと云ふことを意味して居る、デ海外へ御出でになつた方なり又お出でになつたら御分りになりませうが、私は僅に往復の日數を入れて一年九箇月程行つて居たのですが、何所に行つても女中なり下男なりの爲すべき仕事ははつきり規則立つて、一週の間にど

の日は硝子を拭く日で、どの日は大掃除をする日だ、何曜日は午前は洗濯をすると云ふ風に嚴重にきまつて居る、毎日の食事の獻立もきまつて居るから、下男なり下女なりが市場に行つて品物を買入れて來る、是は西洋の女中なり下男なりと云ふものは日本の女中下男に比して働くことは或は少いかも知れぬが、働いた結果は私は却て多いと思ふ、と云ふのは總て斯う云ふ風になつて居る、だから日本でも主人の考如何に依ては同じ女中を使ひ下男を使ふのにも、二人の者は一人に爲し得、一人のものでも非常に樂に使ひ得ると思ふ、何故に不規則になるか、何故に忙がしくなるかと云ふと、言ふ迄もなく第一夫子自から坐つて居るので、自分の部屋に在る品物でも女中部屋に居る者を呼出して取寄せるやうな不活動な事をして居れば、是は女中は忙しからざるを得ぬのである。

次に是は社會の問題で一家だけではないが、客の訪問が不規則である、飯時でも入つて來る、飲物も出す相當な菓子も出す、飯時になれば用意もせんならぬと云ふことで、電話があれば宜いが特に下女を走らして見る、下男を走らして見る、さう云ふ臨時の用事と云ふものが複雜に起つて來る、是がもう少し吾々の社會の生活の狀態が秩序ある狀態になつたならば、全國でどれだけの下男なり下女なり使つて居るか知りませぬが、其大部と云ふものを減じ得るだらうと思ふ、それ丈の女中なり下男は減じても平常の生計に於て影響はない、罷められただけの者は國の爲に生産の方面に使ひ得る筈のものである、自分の勞働に依て活計を立てゝさうして使ひ途のあるものである、女工に行くなり何なりすれば結局進んだ生産を爲し得るものである、二人無くても濟む、三人無くても濟むものを餘分に使つて居ると云ふのは、日本人の經濟と云ふ上に於て大なる缺點ではあるまいかと思ふ、第二は西洋の家屋は堅牢で日本の家屋は弱い、是は當然な話、非常に小さい男が坐るか寢るかしか使はぬ場所と、非常に大きい重い男が腰を掛ける、それでなければ立つと云ふ場合に丈夫なものを使ふ、一方は弱いと云ふことは當然であるが、此弱いと云ふことは今日の日本の總ての社會狀態を現はして居るものではなからうと思ふ、日本の海外貿易に就て言ひましても、いつでも缺點として起る問題は、總てサンプルに出したものは後とから出るものと違ふと云ふとで、直段に懸引があり品物が丈夫でない見掛倒し、が多いと云ふことを聞く、是は日本人の大缺點であらう、堅實でない、唯だ一時のごまかしをして居ると云ふことは、恰も銘々の家屋が示して居るやうに、吾々の使つて居る日用の物品、總ての物擧けて然らざるはなしであらうと思ふ、是は何も弱い建物の中に居ると云ふとが原因でもありますまいが、斯樣な弱い所に住んで居ると弱い物で宜いと云ふことになる、其家屋に附隨して中に在る物品がそれに又比例を取つて行かなければならぬ、非常に弱い建物へ大きな金庫を入れゝば根太が抜けて仕舞ふ、風が吹けば直ぐ動き易いと云ふやうな建物の中へは、勢ひ入れる物品もおのづとそれに應じたものを入れなければならない、斯う云ふ所から、如何なる品物を拵えても堅實と云ふ點に於て缺點を來すのではないか、日本の家屋の中に入れて釣合の取れるものを要求をして居るのであると云ふことになれば、どうしても所謂堅牢なもの持ちのいゝものの、丈夫な物と云ふことは比較的少くとも今日の國民の多數の嗜好に未だ投じないのではないか、而も其投せない根抵と云ふものは、少くとも家屋と云ふものが其原因の重なるものになつて居りはせぬかと思ふ。

尙ほ次に西洋の建物の收容力、卽ち西洋の家屋の建坪と、其建坪の中にある家屋の容積と、日本の建物と其中の容積と云ふものとは非常な違ひがある、西洋の家屋は、私は主として都會に就て申上げる、と云ふのは今日では都會と云ふものは益々膨脹して來る、都會の人口と云ふものは絶對に數に於ても敢て劣らぬのみならず、其集る人種と云ふものは其國の社會狀態に於て最も勢力を占める階級である、外國では何所へ御出でになつても

市中の建物と云ふものは、大きな一つの建物の中に數軒ある、一階あれば一階の中に四五軒ある、三階四階五階と階毎に數軒ある、日本でも今日三菱のビルヂングとか多少それに類したものが出來て來ましたが、要するに外國では一階なら一階と云ふ中に幾つかの家族が居る、一つの階子段を昇れば各自の入口があり名札もあると云ふ狀態である、斯う云ふ狀態の建物の中で、玄關先が少し間取が無くては行かない、內庭が無くては行かぬ、奧庭が無くては行かぬ、物置が無くては行かぬと云ふやうな贅澤を容れる餘地と云ふものは毫も無いのである、日本では吾々のやうな者の住んで居る家でも尙ほ玄關先には空地を持ち、庭も持ち物置も持ち、みんな相當の空地と云ふものを銘々持つて居る、公園ではないけれども私園を銘々自分の家に持つて居る、若し公債の利子、株の配當、是等に依て家にヂッとして活動せずに食つて行く人ならば暫く忍ぶべしであるが、都會に生活して活動する吾々は銘々斯樣な家に住んで居ると云ふ

とは、活動と云ふ上に於て土地の面積に於ける非常なる不經濟だ、東京の如きは都會は都會であるけれども、歐羅巴の都會に比しては私は村落の集合と言ひたいのである、卽ち東京の家屋は今日では調査はどうなつて居りまするか二階が平均になつて居りまするかどうか、外國の如く四階か五階が平均で地下室も持つて居ると云ふ建方を日本の如く一階か二階位が平均で、而も銘々が玄關先も持つて居れば奧庭も持つて居る中に、其人口を包容せねばならぬとすると三倍も四倍も面積を要するに極つて居る、而も此東京が五六年になるか七八年になるか、其以前までは市街鐵道までも出來て居らなかつた、今日市街鐵道と云ふ市の交通機關が無くなつたと假定したならば如何に吾々が不自由を感ずるかと云ふことは言ふ迄もない話、現にこゝ數年前はそれ等の設備すらなしに居つた、此に於てどうしても私は村落の集合であつたと思ふなぜ村落の集合であつたかと言ふと或一箇所で需用と供給の適合することが必要であつた、麹町に

居る者は麹町で供給を得なければならぬ、京橋に居る者は京橋邊で供給を得なければならぬと云ふ組織になつて居つた、外國の都會へ御出でになつたら何所でも分りますが、芝居を見たいと云ふ考で行くと、大概取引所と郵便局と劇場は何所へ行つても一箇所に固まつて居る、纏つた大きなものを拵えて全都の者に利用さるゝことになつて居る、それで日本の多くの都會は人口も未だ少い、戶數も甚だ少いに拘らず、多數に散在して居る爲に、其土地々々に離れて芝居小屋も無ければ行かぬ、玉突もなければ行かぬ、乾物屋なり八百屋なり總てのものが其土地々々に無ければならぬやうに出來て居る、此市街鐵道と云ふものが出來た爲に此狀態が現に打壞されて來た、三越のデパートメントストアーと云ふ者も電鐵が無ければ成立するかどうかと言つたら、私は蓋し出來ぬだらうと思ふ、段々交通が便利に樂に行けて、料金が廉いからと云つて其所へ集つて行く、若しあゝ云ふ設備がなくして車に乘つて行かなければならぬ、徒步して行かなければならぬと云ふ狀態であれば、今日の三越のデパートメントストアーは起らなかつたらう、品物は惡るくても古くても各所に散在せなければならぬ、今日あゝ云ふ組織になつて來たのは、西洋の都市に似掛つて來つゝあるのであるが、今日では未だ村落の集合と云ふ狀態を私は脫却し切らぬだらうと思ふ。

要するに都市で吾々が活動する、所謂ビジネスニーターと云ふものは頗るコンパクトに固まつて出來なければ、吾々はそれに依て時を空しく費さなければならぬ、能く西洋と日本の社交の上に問題になる時の經濟、時間の確實を圖る、寄合をすると云つても豫定の時間よりも數時間遲れる、早く行つたら損だから遲く行くと云ふやうな工合の往時の遣り振では、其終日やる仕事の分量はどれだけ大きいか私は知らぬが、若しそれが同じ人で時間を正しく守るならば尙ほ數倍の仕事を爲し得るに違ひない、從來の時の遲れると云ふことに就ては、是は迚も自分だけが踏張つて見た所で始らぬ、

皆鈎合はなければ矢張り駄目だからと云つて、不都合な方に均霑して行くやうでありますが、私は是は間違つて居ると思ふ、又日本人はだらしないのだからさう云ふ時間の觀念と云ふ事は行れぬだらうと云ふ説もありますが、私は是も行れるだらうと思ふ、それには第一の證據がある、と云ふのは誰某が何時に新橋を出發すると云ふ時に見送る、其時は御覽なさい、大概時間に人が行つて居る、之で見ると日本人もいざと云へば行かねばならぬと覺悟すれば行けるものと見える、之で見れば例へば何時から市會の議事を始めるとか相談會をやるとか、何時から宴會をやるとか、遊ぶ時にしろ、勤める時にしろ、斯う云ふ覺悟をすれば出來ると云ふとだけは、少くとも此事實でゝも私は不可能でないと云ふことは明かだと思ふ、それで私は今日のやうな時間の不正確、不規則と云ふ生活をやつて居ることは、結局遊ぶ事に於ても、又勤めることに於ても、資本は相應に要るが、それだけの効果を收め得ないと云ふことに陷る、それで日本の人間が公共的の觀念に乏しい、親に孝であるとか、夫に貞であるとか、朋友に信があるとか云ふ五倫五常とか云ふことは頗るやかましい、今日でも吾々は其點に於て外國人より確に發達して居るが、一歩進んで外へ出た公共と云ふ道德の上から見ると、殆ど零になつて仕舞ふ、是は私は主たる原因が家屋の構造にあると思ふ、卽ち西洋の家屋に私達が住んで居るとしても、一日の中に用が有つても無くても外へ出ざるを得ぬ、部屋は締切つてある、景氣が惡るくつて氣がクサ〳〵する、戸を開けて顏を出して見ると空氣と云ふ者に味がある、うまいなと云ふ考が起る、是は私等のやうな少い時日でなく、あつちへ留學された方々は皆此經驗は嘗められて居るだらうが、實際狹い密閉した西洋の家屋で長く話をして居ると煙で一杯になる、日本の家屋でも少し話をして煙草でも吸うて居ると、非常に煙になる、それが西洋の密閉した部屋の中であるから想像するに難くはない、一つ公園を散歩しやう、動物園へ行つて見やう、植物園へ行つて見

やうと云ふ考は暇な時があればどうでも起つて來る、家屋が衛生的に出來て居らぬ、今言ふやうに一階の中に四軒も五軒も家がある、其中に吾々が生活して居るのだから、空氣と云ふ者に就ては少くも新しい空氣に飢えて居る、殊に歐羅巴諸國は千島あたりと緯度を同じうして居る、冬にでもなれば十時頃でなければ日の目を見ない、三時頃には日が入つて仕舞ふ、さう云ふ場所で部屋の中は電燈をつけぬ迄も餘程暗い部屋も澤山ある、一日の中に公園へ行つて見やう、市中を散歩して見やうと云ふ、外と云ふ觀念は必ず起つて來る、是は日本人の公園を一つづゝ持つて居るのと同一の談ではない、デ私は始終電車に乘つて居つても、自分がさう云ふ考を起す位であるから人もさう云ふ風に見える、知らぬ人だと云ふと日本人と云ふものは殆ど敵のやうな考を持つ、同時に今度は知つて居る人となると其態度たるや、頗る忙しい、電車の乘降にマアお先へ〳〵と讓合つて居る、此點に於て日本人は極端になつて居る、忙しい電車で順位を爭ふ必要もなからう、讓合ふこともない、然るに一方の人は掛けよと言ひ一方はイヱ宜しいと云ふやうなことで、自分などは昨日も其例を踏んで來たが、自分が入ると兎に角掛けて呉れと言つて立つ、それには及ばぬ、掛けよと云ふやうなことで、他の人も掛けることが出來ず空いて居ると云ふやうなこと、西洋では斯う云ふ例はない、それと同時に今度は知らぬ人と見たら讓らずとも掛ける場所があつてもじや〳〵張つて腰を掛けて居る、此觀念は頗るさもしい卑しい考で、此根本は何所から來て居るかと云ふと、引込思案の外へ接觸することの少いやうに出來て居る、始終坐つた眼で見て居るのだから若かくならざるを得ぬのであるが實際是は同じ吾々は人類で同じ日本人である以上には、知つて居るか知らないからと云つて同情と云ふ念には變りはないが、孔孟の敎でも何の敎でも朋友と云ふことは言つてあるが社會と云ふことが言つてない、同じ意味に考へて宜いだらうと思ふが惜しいかな日本人はさう云ふ觀念に乏しい、

ステーションへ行つて切符を買ふ場合にも、知らぬ人となると押合ひへし合ひする、不幸にして外國へ行つては斯う云ふ例は何所へ行つても見ないのであります、皆順序よく順序を保つて行くので、幾ら日本人の特色を發揮しやうと思うてもそれに從ひたくなる、從ふのが卽ち秩序の保てる所以である。

要するに日本では、例へば、日比谷公園と云ふ者が現にあるが公園と云ふものは大に利用されて居らない、外國のやうに大に利用することをしない、又利用するにはあんな豆ッぱちのやうな公園では何にもならぬ、と云ふのは公園を銘々が持つて居ると云ふことが一方から言ふと損害になる、吾々は遊ぶと云ふことに於ても資本的の遊びと云ふとを知らない、一つの集つた仕事が出來ればキヤピタルとして仕事が出來ると同じやうに、銘々の庭と云ふ者を廢めたならば、動物園も植物園も博物館も公園も各種の設備が出來て、愉快に利用し得る、個人として幾ら富が著しく優れて居つたからと云つて、今日岩崎三井の富を以てしても、それは遣つて遣れぬこともあるまいが、動物園も植物園も博物館も自分の家へ備へて置くと云ふ譯には行かぬ、獨逸あたりの公園へ行つて見ると子守でも動物園へ來て遊んで居る、銘々の庭を一つ所に集めて拵えたのですから愉快に遊んで居る、さうして象と云ふものも見、虎と云ふものも見て、敎育と云ふ上から言つても非常に利益だらう、日本人は遊ぶことに於ても、勤めることに於ても、資本と云ふ觀念が發達して居らぬ、キヤピタルとして遊ぶ、キヤピタルとして勤めると云ふ方に熟して居らぬ、是も今の家屋の構造と云ふものが餘程與つて力がありはしないか。

それから第四には部屋の構造である、西洋の部屋は先づ大抵錠が卸りるやうになつて居る、日本では簞笥などには錠が卸りることがある、併ながら戸障子襖に錠の下りると云ふことはない、鍵の掛け得るやうな仕掛になつて居るのは、近頃多少あるかも知れぬが先づ無いと言つても宜しい、所で西

洋で一つ扉を締めたならば、非常に大きな聲で喋舌れば兎も角も、話をしても聞えぬのである、日本では隣室はおろか二階で話して居つても、下で聞える樣な仕掛になつて居る、言葉を換へて言ふと、西洋の大きな部屋の所々に屏風や仕切を立てゝあるやうなものだ、此如く秘密主義に出來て居る、西洋の家屋の中では親子と雖も別居主義を守つて居る、日本では殆ど一家揃つて同居人眷屬までも一緒に居る、是が私は非常な問題ではないかと思ふ、日本の社會狀態と云ふものは哲學者にでも議論をさしたらどう云ふ議論をするか、私は我田引水の說を主張する譯ではないけれども、人間と云ふものには公私の別がある、表もあり裏もあると云ふことを私は兎に角主張する、今日賢人君子であつたならば、如何なる所に居ても俯仰天地に耻ぢずと云ふことを行ひ得る人があるかも知れぬ、けれども何千萬と云ふ多數の國民に對して、常に斯の如くあるべしと云ふことを强るのはどうだらうか、强て實行し得べきものであらうかどうか、若し人に表裏と云ふ生活の差を明かに立てるやうに、社會の設備が出來て居つたならば、あの人は斯うだらう、どうだらうと云ふ幾多の非難を受ける人も私は受けずに濟み得るのではないかと思ふ今日の新聞紙がさうである、或人が刄物三昧をした、或は金なり戀なりで或不都合があつたと云ふ時は、如何なる下級の人であらうが上級の人であらうが、能く注意を惹く好い材料としてことや細かに其事情を素破拔くのが日本の新聞紙である、國民も亦それを歡迎して居る、西洋の新聞紙ではさう云ふことは少しも見ることは出來ぬ、私がヘルジックに居る時分に向ふのランデパンダンスと云ふ新聞を見た、日本では或人が殺されたとか首を縊つた、傷を付けた情死をした、怪我をさしたと云ふやうなことは、三頁の記事に殆ど毎日出て居る、斯う云ふ或一つの事があると新聞では細かく書立てる、ランデパンダンスの三頁には人の死んだ怪我をしたと云ふ記事は無くはない、あるそれは電車を飛降りやうとして怪我をしたとか、工場

でボイラーが破裂したとか、火藥が爆發したとか、云ふ、機械の相違で死んだとか云ふことで、故意に起つた問題ではない、金であるとか戀であるとか云ふので自分の先きも考へず、自分の家族の將來も考へず、目前の情に籍られて故意に刄物を振ひ、ピストルを振廻すと云ふやうなことは頗る少い、稀に無いともない、現に私の居つた同じ町で、而も向ひの家に私なども知つて居るブルッセルの有名な金持の息子があつた、自分は妾を置てあつたが外に又女が出來たと云ふので、其妾が所謂ヤケで夫と自分とのカッフェへ毒を入れて一緒に飲んだ、私は顏まで知つて居るッイ向ひの二階に居つた人で、今斯う云ふ騷まであつたと云ふことを聞て、あすの新聞にどう出るかと云ふことはエキスペクトして居つた、所が何區の何町に住んで居る、BならBと云ふ頭文字一字で、Bと云ふ人が自分の知つて居る女に毒を飲まされたが生死は不明であると云ふ僅か二行ばかりの記事がランデパンダンスに載つて居つた、私は惡るい事をしてもそれを隱したらどん〳〵惡るい事をするだらうと云ふ說と、どん〳〵明放しになると云ふ爲に捨鉢になると云ふ說と、此邊の出入と云ふ者はどう云ふものであらうかと思ふ、で日本人は明放しの中に年のいつた者も居るし若い者も居る、或時ばかり出會つても衝突すると云ふものが、四六時中爺さんも婆さんも老人も自分等夫婦も、自分等の子供も下女も下男も、皆一緒に居ると云ふ時に、果して是等の各種の階級の男女老幼と云ふものが平和に無事に一家を構成することが出來るか、現にやつて居るではないか、斯う云ふ御答が直ぐあるだらうと思ふが私はやつて居れぬと思ふ、なぜやつて居れぬかと云ふと日本人は家族が共同に生活をして居ると云ふ爲に、頗る總ての感情を撓めると云ふとを小さい中から養成されて居る、今日親子夫婦、種々の頭の違つた、考の違つた人が一緒に住んで居る以上は、是等の人が或說を演べて自分はそれは反對である、自分はそれに對して非常に不愉快である、不平であると云ふ場合と雖も

それに對して一々自分の意見を各自が主張した日には朝から晩まで喧嘩が絕えぬ、從つてそれをは忍ばねばならぬ、所謂喜怒色に見はさずとか、辭色平然たりと云ふやうなことで、子供が戰役で出掛ける時に笑つて送る、無論親が子供が戰に出掛けるのを悲しいと云つて泣て引留めると云ふことは愚の極であるが、それを逆に笑ふと云ふと云ふのも餘程考物ではないか、それで若し言行一ならずんば忠ならずとか云ふことは王陽明の言でしたが、所謂口と心と違つては行かぬと云ふことを能く言ふ、さうかと思ふと、一方では腹で笑つて居ても顏で怒つて見せる、腹で泣て居つても笑つて見せる、無論時と場合があることであらうが、私があつちに居つた各種の狀態から綜合すると、確に西洋人はおかしい事があれば遠慮なしに笑ふ、少しでも辛い事があれば直ぐ泣く、品物を贈つた時でも、贈られた時でも、其感情と云ふ者は西洋人の方が直覺的であらうと思ふ、之に反して日本人のはどうも怒らにやならぬ、不平を言はにやならぬと思ふ時でも笑ふ、多くの時は窮した時に却て笑ふ、果してそれは愉快に歡迎して笑つて呉れるのやら、胡麻化さうと思つて笑ふのやら、何となしに笑ふのやら、頗る其感情の表はし方と云ふものが分らない、日本人ほどけんのんな表情をする者はない。

それで私は下宿生活をしたこともあるし、又自炊生活も隨分した事がありました、色々な生活をしましたが、要するに下宿なり自炊なりして居る書生時代の生活と云ふものは、御承知の通り寢室と云ふものがあるぢやなし、書齋と云ふものがあるぢやなし、全く一室に居るのであります、其で私は斯う云ふことを思ふ、外國で私の現に居つた所などであつた事であるが、其所には後家さんの姉妹が居る、其銘々の娘の婿を貰つてあるが、婿達は皆離れた所に一軒の家を持つて居る、日本などでは亭主に先だたれた後家さんが、姉妹居るとは言ひながら自分の娘が婿を取りながら、其婿が別々に居ると云ふ事は、ちよつと想像し惡い事である、

所で其婆さんが病氣になつた、私等が見ても今度は死ぬと思ふ位一時は重かつた、其病氣が三月ばかり續いた、所が自分の娘の夫婦と姉の娘の夫婦とが交替で看病に來る、十二時までで交替して銘々手を引いて家へ歸ると云ふことで、それを終ひまで續けて居つた、此時私は思つた、支那の節婦の傳とか孝婦傳とか云ふものに、夫が病氣になつた或は母が病氣になつた、子たる者妻たる者が之を看病して十年衣帶を解かずとか云ふことが漢籍に見えて居る、非常に其人は健康體であつて十年の間、帶も解かずに看病が出來た、勿論此衣帶を解かずと云ふのは形容した話ではあるでせうが、斯う云ふやうに看病を仕詰めると云ふやうな殊勝な心懸の人が多い事を望むが、是が總ての人に押擴め得べきことであらうかどうか、是等に就ては親子夫婦の間、兄弟の間に於ける五倫五常の問題の外に、吾々は社會の爲め國の爲に活動せねばならぬと云ふ世の中に、斯の如き事は總てに爲し得べき事でない、若し是が今のやうに或時を限つて交替で看病する、さうして休息する時は休息すると云ふやうにしたならば、いつ迄續いても誰にでも出來、看病して居る時は笑顔を見せることが出來て持續的の方法ではあるまいか、吾々の考ではどうも朝から晩まで附纏つて三十日の間看病して居れば、病氣の都合に依ては熱もあらうし、神經も高まつて小言も出る、苦しいと云ふ心で看病して居るのだからどうも面白くない、表と裏とあり、休息と勤めると云ふことがある爲に、却て病氣の爲かしら言つても都合の好い結果を來しはせぬかと思ふ。

吾々の下宿生活の時代に夏暑いからと云つて下宿屋で肌を脱いで寐てろんで居る、其所へ日本の流義であるから默つてやつて來てオイ下村居るかと言はれた時に、肩を入れる間があるか、起直る間があるか、若し是が西洋のやうに相圖をしなければ入れない、應接室へは默つて入つても其人の居室へは入れないやうになつて居れば、誰も自分の居室で肌を脱いで居るので、應接室へ行つて肌を脱

いで居ると云ふことは幾ら日本人だつてそんな事はない、今日裏と表と云ふことをハッキリ立て得るものならば吾々は居室の中に居つて、肌を脱いだ所を女中にも見せない、自分が自惰落にして居る所を其子供にも見せない、草臥れたと思へば寢室へ入つて休んで居る、暑いと思へば寢室へ行つて肌を脱ぐ、其所へは無斷に入らぬと云ふことになれば、此所で表裏と云ふものが明かに立て得るのではあるまいか、今日俯仰天地に耻ぢぬとか、どんな事をされても我に秘密はないと云ふことは立派な事ではあるが、秘密のないと云ふことより人に見せて宜いとと惡るい事がある、人に聞かせて宜い事と惡るい事がある、甚だ汚い話であるけれども、今日夫婦の間でも、親子の間でも、日本では秘密の間であるが鍵のかゝつて居らぬ所は雪隱である、子が雪隱へ入ると親に言うた所が別に疚しい事ではないが、さう云ふ所を親があけて見た所が、親がそれに依て快感を得るかと言へば何等得る所もない、それで吾々の居常起臥の上に於て常に場合に依ては見せて惡るい事がある、即ち自分は加減が惡るいとか其他各種の事情があつて親も一緒に住んで居る、所が自分はどう云ふ事情かで人から金を借りて居らぬとも限らぬ、又職務上に、どう云ふ事柄があるかも知れぬ、それで人が來て話をする、西洋のやうな戸締になつて居つたら秘密に話も出來るが、日本の家屋では隣の部屋に居つても二階に居つても聞える、それが爲に其人が歸つたあとでどう云ふ事かと言つて聞く、それは斯う〳〵云ふ事だと言はねばならぬ、何にも聞て役に立たぬ、聞た爲に却て老人が心配するやうな事は能くあると思ふ、知らずに居れば無事に濟む、知つたからと云つて何の力になれる譯ではない、けれども耳に入つた爲に非常に心配を掛ける、場合に依ては心配し過ぎて却て餘計な事を仕出來して害を及ぼすと云ふやうな事も實驗して居る。

それで今日の日本人が姦落であるとか構はぬと云ふのは姦落の方が宜いと云ふのではない、已むを得ず姦落になつて居る、是は私は家屋が開放的

になつて居る結果だと思ふ、どの部屋も〳〵見通しになつて居ると云ふことが矢張り是は習慣の上に及ぼして、自づと色々情を撓める癖も服裝も何も構はぬとか云ふことも起つて來る、西洋人はちよつと外へ出る時でもシルクハットを冠つてちやんと片附けて居る、裏のことははつきり分らぬやうに出來て居る、それが分つても明け放しにすると云ふのとどちらが宜いか、是れは餘程研究問題であらうと思ひます、それで以上が先づ私が家屋の構造と云ふことから一般の社會狀態にどう云ふ影響を持つか、時と云ふことの經濟、場所と云ふ上の經濟、吾々の行動と云ふ上に如何に家屋の構造が影響を及ぼすかと云ふことで、私は家屋の構造から研究したのではないが、あつちに滯在して居る間にどうも斯う云ふ事は日本と違ふ、是は何であらうかと云ふことを考へると多くは此所へ入つて來る、家屋の構造の爲に直ぐ右になり左になると云ふことではないけれども、さう云ふ社會の風俗習慣と云ふものに自から家屋の構造がなつて居ると見て宜い、要するに是等の點が私が感じた主なる點であります、所で申上げまする迄もなく歐米に行かれて各種の點に就て感ぜられたことは本日の阪谷男爵なり床次地方局長は行政研究會で各々話されたことがある、床次君のは歐米所感として今度刊行されて居りますが、何れもあつちへ行つて見るものゝ方が優つて居る點も澤山ある、彼の劣つて居る點を比較して悅んで居るばかりでなくして、彼の優つて居る點を先づ思ひ、なぜ斯うであるかと云ふ考を持つのが阪谷男爵の所謂大計と云ふものに近いだらう。

自分は日本人と西洋人と云ふものは第一壽命に於て日本人の方が短い、第二に日本人の方が西洋人よりも生產時代が短い、此生產時代が短いと云ふのは假に日本人も西洋人も壽命は同じだけの長さがあるものとして、何故に西洋人の方が生產時代が長いかと言ふと、早く積極に生產する時期に入り得ると云ふことだ、此點の理由が阪谷男爵の三つの缺點の第一に擧げた所以で、吾々は外國人と同じく學校の敎育を受ける上に於て象形文字を學ぶ、其爲に三年餘計に掛かる、それから又吾々は外國語を學ばねばならぬ、私等が子供の時分には英語位知つて居れば宜かつたものが、獨逸語、佛蘭西語、露西亞語も知らなければならぬと云ふやうに益々殖へて來る、是等の餘計なものを習ふ爲に餘分な時が掛かるとなれば、假に日本人の智力も西洋人の智力も同じものとして、日本人の方が資本を入れることが多い、勞力が餘計掛かるから、それだけそれをコンペンセートする爲に餘計働かにやならぬ、働く時期に入ることが遲くなる爲に、働いて仕舞ふと直く隱居する、多くは身體が弱つて仕舞つて隱居する時期が早くなる、資本を入れて其資本を取復す爲に活動する時期が短い、其短い間に日本人は西洋人と比べてどうかと言ふに頗る時に於て不經濟である、遊ぶことも能く遊ばないし勤むることも能く勤めない、日本人は能くコンパクトに、遊ぶのにも面白く効がある樣に遊ぶことすら出來ない。

それで共同して生活すると云ふ上に於ても、親子なら親子と云ふものが互ひに常に抱付くと云ふ意味を持つて居る、親は自分の悴が一人前になつて、社會に活動出來るやうになつても、一人前として世の中に立つのは危いとして中々働かしめない、それで今度子が働いて來るやうになると自分は年は老つて子の力に倚縋つて仕舞ふ、日本人と西洋人は同じだけの働く力があつても假に西洋では百人の中に三人と云ふものは監獄へ入る者もあり瘋癲白痴の者もあり不具者があるとして、是等は銘々がコントリビューションを出して拵えた養育院なり孤兒院なりへ收容出來る、其他の者は銘々勝手に働く、日本では一人成功した者があるとすれば、從兄弟なり異母弟なり、同窓であるとか同鄕であるとか、色々な理由を製造してそれに縋つて來る、卽ち一人がプラスであると傍からマイナスで相殺して來ることが日本の風習である。

今日日本の人口は益々殖える、年々五十萬人から殖える人間を如何に處分するか、滿洲とか韓國

とか云ふ所があるにしても、錢の高い日本から錢の低い所へどうして移民出來るか、佛蘭西のやうな人口の增加の微々たる國としてもさう云ふことはしない、同時に此殖える人間と云ふものが皆プラスで立つ人間であるならば兎も角、他のプラスをマイナスに消さうと云ふ人間が多い時分には決してそれで行ける筈はない、西洋人も日本人も同じ力である、同じだけの生產時代があるとして、銘々が能く勤めると云ふやうに、假に一歩も二歩も讓つて仕舞つても、最後に殘つて居るのはプラス、マイナスに相殺する性質を持つて居ると云ふことである、それで此慶應義塾の理財科の諸君にはでく諄いことかも知れぬが、福澤先生の修身綱領の第三條『自から勞して自から食ふは人生獨立の本源なり、獨立自尊の人は自勞自活の人たらざるべからず』と云ふことがある、是だけのことを守つたならば日本の富と云ふものは蓋し著しい增額になると思ふ。

家屋の構造なり家族制度と云ふものゝ日本の將來はどうなるか、家屋の問題に就ても現に建築學會で造家學者は各種の議論をして居る、和洋折衷になつて行くものが、一つの新機軸を出すべきものか、絕對に西洋の家屋のやうになつて行くべきものであるか、是等はどう云ふものであるかと云ふことは建築學者として議論がある話で、吾々は多少經濟と云ふ方を研究する方面として、どう云ふ方法が實行し易い方法であるか、比較的理想に近く實行し得べき最も良い方法はどうであるか、是等の問題は蓋し諸君の御研究になるべきもので複雜なるだけ多方面なるだけ、それだけ面白い問題であらうと思ふ、殊に其問題に直接關係を持つのは所謂日本の家族制度である、是は私は日本の方の缺點と西洋の方の長所ばかりを申上げたのだが、個人主義、孤立主義と云ふものも極端に走れば弊害がある、彼の長を採り我の短を補ふと云ふのが最も必要である、少くとも獨立自尊の人間にならうと云ふには始終吾々が欄干となり手摺となつて手を出す風習を廢めなければならぬ、子は一人で渡れる、但し渡る時にはそれに縋ると云ふことを廢めなければならぬ、互ひに力あるに拘らずそれを出さないと云ふのは尙ほ忍ぶべきことであるし。

今度は反對に人の富を占めなければ人の權利を害する、是も修身綱領の第十四條に『社會共進の道は人々自から權利を守り幸福を求めると同時に他人の權利幸福を尊重して苟も之を犯すことなきを以て他の獨立自尊を傷けざるなり』とある、今日のやうに金を持つて居る時は借りる理由の如何に拘らず斷るに困る、金が無いと云つて借りたものを返さぬと云ふ人は、面白いとか姦落とか象宕とか何とか言つて居るが、或條件を附して借りながら其を返さぬと云ふに至つては、頗る先きを考へざるの甚しきものと言はねばならぬ、此家族の生活、家屋の構造と云ふ問題等は日本の將來に於て、頗る重大なものであらうと思ふ、私は餘り世上の聲を聞かない、獨り聞たのは昨年倫敦タイムスのチロールなる人が大隈伯を訪うた時に、日本は今家族の生活狀態から個人の生活狀態に移る時代であるが、どうして移れるかと云ふことを第一に問うたことであるが、現に民法でも刑法でも皆さう云ふことで三族に及ぶと云ふやうな方針は無くなつて、個人の權利を尊重したものになつて居る、今日の社會が總て其狀態に移り變ると云ふ過渡時代になつて居る、此時に際して是は如何になるべきか、どうなつたならば其利のみを得て害を除くことが出來るかと云ふことは、是は諸君に對する非常に大なる研究問題ではないかと思ふ、私の今日此所に申上げたのは是等の各種の問題に就て諸君の御研究を願ひたい、是は阪谷男爵の所謂大計であつて、而も是は今迫つて居ると言ふよりは現に其渦中に吾々は投ぜられて居る問題である而も此問題に對する吾々の覺悟、吾々國民の解決如何と云ふことは、所謂將來の日本の發達すると云ふ上にどれだけ大きな影響を持つて來るか知れぬだらう、私は尙ほ此言葉などに就ては、大計と云ふものに對して大々計とでも謂ふべきか、所謂

日本國家と云ふ考ばかりでなく世界全般の利益の爲に、エスペランドと云ふやうな言葉を理想として、各國民の言葉が共通になる方が幸福であらうと信じて居る、突飛な考で理想であると言へば理想であるが、突飛であると云つて引込んで居つたならばいつの日が彼岸に達することが出來やうか。

要するに今日私は諸君に御研究を願ひたいのは家屋の問題、家族の生活と云ふ問題であつて、今日直ぐ生計すら立たぬ中に別居をなさいと御勸告する譯でも何でもない、世間の狀態、一家の經濟、各種の問題があるし、又今日の日本人は西洋人の知らざる家族生活の團欒と云ふものを樂み得る狀態であるが、是が永く續き得るかどうかと云ふことに考へ及んだならば、何か此際に所謂特殊の方法を用ゐるか、在來の主義を固守するか、是等が所謂諸君の御研究を願ひたい所以である、唯だ私は今日の日本人と云ふ者は西洋人に比して壽命の短いことも事實である、生産時期の短いことも事實である、此短い生産時期に於て確に吾々は餘計な時をを使ひ勞力を使つて居ると云ふことも事實である、而も中には積極に不經濟ながらも勞力を使ひ時を使つて居る者に對して、其權利、富と云ふものを消して掛かると云ふ連中が非常に多いと云ふ社會狀態にあると云ふことも事實であらう、是は研究と云ふ問題の外で、どうか吾々御同樣にせめては一本立になれば親にも迷惑を掛けぬ、友人にも迷惑を掛けぬ、少くとも自分は自分だけの力で立つて行かねばならぬと云ふだけに、せめて御互ひだけでもなつたならば、日本の爲に益することは甚だ少くはないだらうと思ふ、でく大雜杯な議論でありますが之で御免を蒙ります。

（六月十八日於理財學會大會文責在記者）

雜錄

「ヴント」氏生理的心理學所載の變體精神現象

稻垣末松

第一章　變體精神現象とは如何なるものを謂ふか

變體精神現象とは意識の狀態が通常と異なつた時を謂ふのであるが、其意識の狀態はどういふ時に通常と異なるかといふに、それには大凡二つの場合がある。一つは各個の觀念の性質に於て異常が來る場合であつて、例へば何も實物がないのに柿の形が見えたり、又は干してある浴衣が妖怪に見えたりするやうな場合である。一つは各個の觀念を連絡結合する仕方が通常と異なるといふやうな場合である。例へば數年前に死んだ人が今茲に出て來て數百里を隔てた人と對話をするといふやうな工合に、到底事實上結合して關係を附ける事の出來ない觀念をば相互に結合して關係を附けるのをいふのである。而して此二つの場合中第一の場合のやうに、各個の觀念性質に於て異常が來る時には之を幻覺及び錯覺と名けるのである。又第二の場合のやうに觀念の連絡結合の異常が來るのは吾人の睡眠中か又は催眠狀態中か若くは精神混亂の時かである。今吾人は茲に此五種の現象卽ち幻覺、錯覺、睡眠、催眠、精神混亂を論じようとするのであつて、又茲にいふ變體精神現象とは此五種を指すのである。但し睡眠や催眠や精神混亂の時には感情の樣子は一種特異になり、且その中に現はれる各個の觀念は常に幻覺、錯覺の性質を帶びるのである。從つて茲には先づ幻覺、錯覺から說明し始めよう。

第一　幻覺

幻覺とは以、前に得た事のある觀念をば何等の外界の刺激なくして再び想ひ起し、斯て宛ら實物に接する樣な心持をなすのをいふのである。從つ